

劇場型首長の研究：ポピュリズム論から見た意義と戦略

著者	有馬 晋作
ファイル(説明)	博士論文全文 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨
学位授与番号	17701乙人社論第1号
URL	http://hdl.handle.net/10232/23699

平成27年2月2日

鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科長 殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 有馬 晋作

学位論文題目

劇場型首長の研究 - ポピュリズム論からみた意義と戦略 -

(A Study on Municipal Chiefs for Dramatic Politics - Meaning and Strategies from Populism Theory)

論文審査の概要

1. 論文の狙いと概要

本論文は、日本の地方自治体における首長、とくにメディアを巧みに利用し世論の支持を獲得することに成功した「劇場型首長」の比較研究であり、5人の代表的な「劇場型首長」の比較検討を通じて、近年注目を浴びている政治現象の一つであるポピュリズムの日本的な展開の特質を明らかにしようとしたものである。検討の組上に乗せられる「劇場型首長」は、田中康夫長野県知事、東国原英夫宮崎県知事、橋下徹大阪府知事、河村たかし名古屋市長、竹原信一阿久根市長の5名であり、各首長の政治行動、政策、対メディア戦略についての分析を通して、それぞれの首長の特徴と共通点を析出している。こうした分析を通して、今日の日本の地方自治体において劇場型首長が登場する背景を考察するとともに、ポピュリズムの現代的な形態の一つに日本の劇場型首長が位置づけられるという結論を導きだしている。

なお、本論文は、有馬氏による2冊の単著（『東国原知事は宮崎をどう変えたか—マニフェスト型行政の挑戦』ミネルヴァ書房、2009年、『劇場型首長の戦略と功罪—地方分権時代に問われる議会』ミネルヴァ書房、2011年）をベースとしたものであるが、理論面での研究史上の位置づけを明確化するとともに、具体的な分析面でも新たな資料を活用し、

より精緻な分析を試みたものである。

2. 論文の構成

本論文は、研究史と其中での本論文の意義を検討する序章、具体的な分析を展開する1章から9章、分析を踏まえた考察を行う終章、の計11章から構成されている。

序章において有馬氏は、ポピュリズム論と劇場型政治という二つの概念に着目し、それぞれの概念が登場した歴史的経緯にまで遡って検討している。有馬氏によれば、本来この二つの概念は異なる歴史的文脈から登場したものであり、今日の政治学及び行政学においては二つの概念が未整理のまま使用されており、両概念の区別と連関を明らかにする必要性を指摘している。同時に、劇場型首長に関する個別的研究は存在するものの、比較研究はほとんどなされておらず、劇場型首長の比較研究を通じてポピュリズムと劇場型政治の再定義という本論文の目的を提示している。

第1章及び第2章は、具体的な比較研究を行う前提的作業として、日本の地方自治体における首長の歴史的変遷（第1章）、日本政治とメディアの関係の歴史的変遷（第2章）を概観している。有馬氏は、革新自治体、タレント知事、改革派知事といった首長の歴史的変化の後に劇場型首長が登場したこと、劇場型首長登場の背景にはメディアとくにテレビの積極的な利用があることを指摘し、こうしたテレビと政治の接合を「テレポリティクス」という用語で説明している。

首長及び政治とメディアの歴史的検討を踏まえ、第3章以降での5人の劇場型首長に関する具体的な分析が試みられている。まず、田中長野県知事（第3章）、東国原宮崎県知事（第4章）、橋下大阪府知事（第5章）の3人の知事について、当選までの経緯、当選後の具体的な施策、行政及び議会との関係、メディアとの関係について、地方紙を含む新聞記事、行政資料、行政機関へのインタビュー等の資料を利用し検討を行っている。第6章は、3人の知事についての個別の分析を踏まえたうえでの比較を試みている。有馬氏によれば、メディアの積極的利用、敵を設定し攻撃することによる世論喚起など、3人の知事には共通点も多いが、対行政関係、対議会関係や政策立案の手法などにおける重要な相違点も指摘できるという。こうした相違点は、それぞれの知事が登場した時期、メディア環境、都市型か農村型か、といった違いに起因するとの指摘がなされている。

次に、河村名古屋市長（第7章）、竹原阿久根市長（第8章）の二人の市長について個別の分析を行ったうえで、第9章において両市長を比較検討している。ここにおいても、3人の知事の比較で得られた結論とほぼ同様の共通点と相違点が指摘されている。

終章では、9章までの個別分析及び比較研究に基づいて、5人の劇場型首長を5つの観

点（首長の立ち位置、敵の設定、活用したメディア、政治・政策課題、劇的な要因）について整理し、5人の首長の共通性と相違点を確認している。さらに有馬氏は、これら劇場型首長の功罪を指摘したうえで、日本におけるポピュリズムの今日的な形態として劇場型首長を把握することができるとし、インターネットに象徴される新たなメディア環境の拡大する今日、劇場型政治を伴うポピュリズム研究は益々重要になるとの展望を指し示している。

3. 本論文の評価すべき点

本論文は、地方自治体における強烈な個性を有する首長を劇場型首長という概念で捉え比較研究を行っている。個々の首長についての分析は、中央紙及び地方紙の新聞記事を丁寧にフォローするだけでなく、各自治体の行政資料、さらには有馬氏自身による行政機関へのインタビューを用いており、すぐれた実証分析になっている。また、未開拓の領域である比較首長研究を試みた点、現代日本政治分析を通じたポピュリズム論の再構築という理論面での考察を試みた点も評価できる。

4. 問題点

本論文では、5人の劇場型首長の分析を通して、ポピュリズムの現代的な形態として劇場型政治を捉えているが、もっぱら首長の政治スタイルや政治行動に焦点が当てられていることにより、他の政治的アクターや世論との関係が必ずしも明確ではない。また、劇場型政治が登場する背景として大衆社会化の進展が指摘されているものの、大衆社会自体の歴史的变化を十分に視野に入れていたとは言えない。さらに、論文中使用されている用語のなかに、曖昧なかたちで安易に使用している用語（たとえば、功罪とメリット・デメリット等）があり、明晰な分析を妨げている部分がある。

5. 総合評価

以上のような問題点を指摘することができるが、本論文は、具体的な事例についての実証的な分析を踏まえた比較研究を通じて、ポピュリズムの現代的な形態について説得的な論を展開している。理論面での課題を残してはいるものの、本論文で展開された分析結果とそれに基づく考察は、政治学及び行政学、とりわけ地方自治をめぐる政治と行政に関する研究に新たな知見を提供するものであり、博士（学術）を授与するに値する水準にあると評価する。

授与する博士学位 學術

論文審査結果 合・否

審査委員

主査 (氏名) 平井一臣

副査 (氏名) 木村 朗

副査 (氏名) 城戸 秀之

副査 (氏名) 畑山 敏夫